

平成21年5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520268
 研究課題名（和文）四国地方をフィールドとした双方向的言語変化モデルの構築に関する研究
 研究課題名（英文） Formation of bidirectional change in linguistic structure
 observed in the Shikoku region
 研究代表者
 上野 智子 (UENO SATOKO)
 高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
 研究者番号：20127616

研究成果の概要：

- (1) 「不定詞+でもは～ない」という表現形式において、四国方言内部に観察される言語変化を整理すると、退化・進化それぞれが認められ、地域的に相補分布を形成していることがほぼ明らかとなった。
- (2) 「や」で短く言いおさめる感動表現は四国地方にさかんな詠嘆法であり、地域差が観察される。恐れ・憐憫・喜び・驚きについて調査した結果、恐れによく保たれていた。全般的には(1)との類似性が認められ、「や」詠嘆法は南予に音変化「～シャ」が讃岐地方に盛んである。
- (3) (1)(2) いずれにも、退化から進化（新化）を経た活性化がある一方で、衰退から衰滅状況を呈する地域が含まれる。四国という、四県の単なる集合体ではなく、瀬戸内海と太平洋に囲まれ、内部に四国山地を擁する大きな言語帯の中に現れた言語動態の一端を解明できた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	600,000	0	600,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2300,000	360,000	2660,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：四国方言、感動表現、失意・失態表現、地域差、世代差、変異形、双方向的、言語変化

1. 研究開始当初の背景

言語変化には進化（新化）と退化（衰退）の2種類が大きく見分けられると考える。予備的調査において、進化（新化）・退化（衰退）現象が予測できる、3つの言語形式に絞り、これまで研究の視座に据えられなかった文法現象に着目した。

(1) 四国方言では部分否定構文「～もあれ、～ぬ」において、香川県・愛媛県では進化（新化）、高知県・徳島県では退化（衰退）と判断される様相が見られる。係り結び「こそ」に関する日本全体を視野に入れた研究成果がいくつか公表されているが、係助詞「も」に関わる、部分否定構文「～もあれ、～ぬ」

に関する研究はまだ例がない。四国地方に（通時的に表現すれば）特徴的に残存する文法現象であり、しかも、その四国内で形態変化があり、文法機能にも差異が認められるようである。四国内部に生起している、こうした変化が何によって引き起こされたのか、その要因を全 15 地点の共時的な比較考察をとおして明らかにする。

(2) 感動表現の一形式である「形容詞語幹＋や」が愛媛県南予地域を中心とした四国西南部に今も盛んに行われ、形容動詞にも及ぶような進化（新化）が認められるが、文献史料に拠る限りでは他の四国地方や周辺の九州・瀬戸内海域の中国地方では「オトロシヤ」1 語に特化されており、著しい退化（衰退）が観察される。四国全域を網羅できる主要 15 地点の精査を行えば、文献では得られない共時態が把握できることによって、四国西南部のこの表現形式の動態が解明される。

(3) 「しまった！」など、発話者の失意や失敗したときの感情を対自的に表現する言語形式において、高知県ではさまざまな表現が認められる。これは他県には認められない特徴的な言語形式の多様性に支えられていることをすでに試みた調査研究によってある程度明らかにした。ここには進化（新化）と退化（衰退）の二つの相があらわれており、このこと自体が注目値するが、四国の他地域ではどのように展開しているのか、四国内の内部変化という視点から、四国全体に広げて、あらためて問題にする。従来、高知県の通時的独自性が四国共時態と切り離されて議論されやすかった、という過去の反省を踏まえて、連続体としての四国を視野に収めることにより、新しい知見を得る。

2. 研究の目的

『消滅の危機に瀕した世界の言語』（宮岡伯人・崎山理編、2002 年）など、近年、危機に瀕する言語（以下、危機言語）に関する研究が、急速な世界情勢の変化に即応して、国内外で活況を呈してきた。四国地方はこの 10 年間に起こった道路交通網の画期的な整備によって、長く島であった時代に訣別した結果、否応なく政治・経済・社会・文化など、多局面における激変にさらされている。言語変化においてはまだ目立った大きな変化は見られないものの、今後は次第に顕在化してくることが予想される。本研究では、四国地方内における複数の特徴的な言語形式の実態を 15 地点の臨地調査によって精査し、言語変化のモデルを構築する。はじめの 3 年間に愛媛県主要 5 地点、香川県主要 2 地点、徳島県主要 3 地点、高知県主要 5 地点、合計 15 地点の精査（質問調査・自然会話の収録等）を実施し、四国方言という共時態の視点から分類整理し、検討を加える。最終 4 年目は通

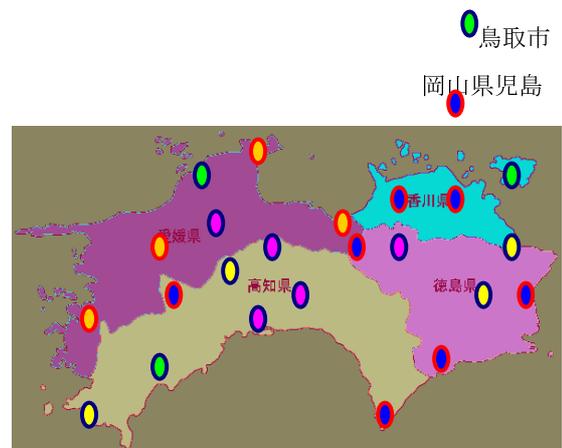
時的な視点を導入して、全 15 地点の調査結果を比較しながら、言語変化のモデル構築を行い、四国という限定された地理的・文化的・言語的環境に認められる言語変化の特質を浮き彫りにすることを到達目標とする。

3. 研究の方法

面接質問法を用いて、性差・年齢差に配慮して、できるだけ多くのインフォーマントを得るよう努める。8 つの大項目からなる質問を、会話の流れを重視しながら、1 人あたり 30 分から 1 時間くらいかけて聞く。文例を示して尋ねる質問では、インフォーマントの合わせた場面設定と文脈を臨時的に工夫しながら進める。期待する表現が聞けない場合は、適度に誘導し、各表現の有無は必ず確認する。

4. 研究成果

調査地点は 15 地点を目標としたが、4 年間で図に示すような、周辺域 2 地点を含む、計 25 地点を踏査することができた（→図 1）。当初の計画 15 地点を大幅に上回ったのは、各表現形式がこまかな音変異形を派生させているという、言語形式の自在な変化現象が、予想以上に豊かであったことと、とりわけ四国山地という県境域の重要性についての認識が調査の度ごとに高まったからである。



● 2006.3	4 地点
● 2006.6 ~ 2007.3	8 地点
● 2007.4 ~ 2007.10	4 地点
● 2008.2 ~ 2008.4	4 地点
● 2008.7 ~ 2009.3	5 地点

愛媛県 6 地点	香川県 4 地点
徳島県 5 地点	高知県 8 地点
岡山県 1 地点	鳥取県 1 地点

図 1 調査地点

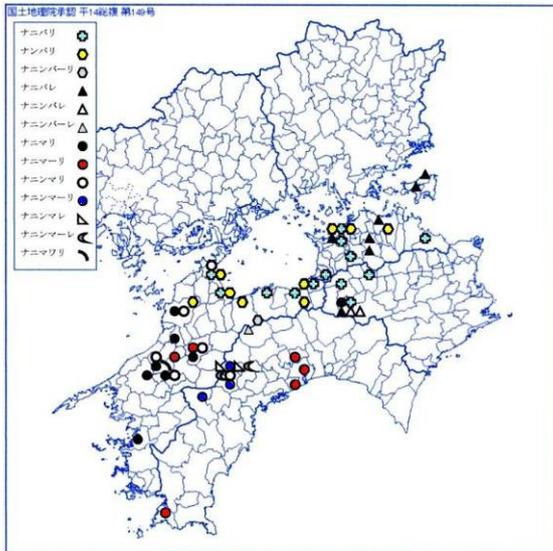


図6 「何でもは (~ない)」

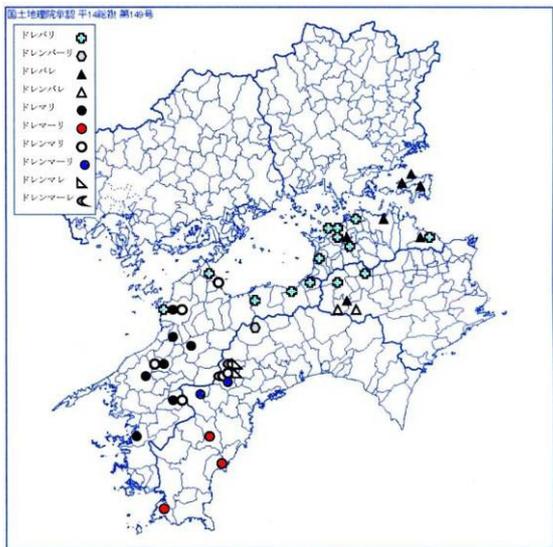


図7 「どれでもは (~ない)」

- (1)原型に最も近いと思われる「不定詞+ンマーレ」・「不定詞+ンバーレ」は四国山地の中心から各々西と東に分かれて分布する。
- (2)後ろ部分の変化形「マーリ」「マリ」([m])と「バーリ」「バリ」([b])に注目すると、[m]は西半部に[b]は東北部に分布する。
- (3)最も短縮された形態「~バレ」「~バリ」「~マレ」「~マリ」は、愛媛・香川県に多く瀬戸内海側に偏在しているように見える。
- (4)高知県東部とそれに続く徳島県の一部山間部を除く広い地域では、全くふるわない。消滅したのか、もともと存在しなかったのかについては、今後の検討が必要不可欠であり、文献に基づく通時的考察が欠かせない。

い。
 (5)どこ・だれ・いつ・何・どれ、が一つの体系を構成しながら四国方言に「~もあれ、~ぬ」という表現形式を栄えさせてはいるものの、すでに体系がくずれている方言も少なくない。「どこ・だれ」については言うが、「いつ」については言わないところがある。また、否定で結ぶ、という原則が破られて、構文をなさなくなっている例が短縮形態に現れやすい。変化が進行した結果、あらたな進化(新化)が起こったと判断される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 上野 智子、四国方言、日本語学、第26巻第11号、190-191、2007、査読なし

[学会発表] (計1件)

- ① 上野 智子、「恐ろしい!」と叫ぶとき—日本語方言における「や」詠嘆法の系譜と伝播、高知大学国語国文学会、2008年11月29日、高知大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 智子 (UENO SATOKO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
 研究者番号：20127616

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし